

団長ちゃんの方が
分からなくなつて
一か月以上が経過し…

私はアウギュステ列島の
リゾート施設で
団長ちゃんの姿を見た
知らせを受け…

いても立つてもいられず
そのリゾート施設に
潜入することにした

女性、水着着用限定で
特別会員のみに
入れるという部屋…

表向きは普通の
施設だったのだけど…

立ち入り禁止の
通路の先…
そしてこの警備の数
間違いないわ
何かある…

団長ちゃんを
見たという
情報の場所に…

おそらく何かの薬品…
でも…っ!!

次第に体が…
お腹の下が…
熱くなってきた

奥から漂う
甘い香り…

この奥に
団長ちゃんが
いるかもしれない

その考えが
危険信号を
麻痺させた…
そして—



その中心に…

それらが交わった
噓せ返るほどの
獣臭

(団長ちゃん)
彼女はいた



汗と唾液

子種…

雄と雌…



「いいじゃねえか
マグロ女犯すより
抵抗して来た女を
ひん剥いていく方がよ」

「今となっては
薬でまともに動けずに
メスイキするだけの女だ」

「どうあがいても
俺たちに勝てねえよ」

「さっきまで新品だった
水着がもうボロボロに
なったじゃねえか」

「ちっとは加減しろよ」

「しょうがねえだろ
いきなり抵抗して
きたんだからよ」



そこには…

目を疑うような
光景が広がっていた。

「オラ、赤ちゃんに
たっぷり栄養
くれてやる」

「受け取れや…っ!!」

「とんでもないんなに
激しく犯して中の胎児は
大丈夫なのか？」

「大丈夫だろ」

赤…ちゃん…?

何を…言って…

「何せ、孕ん中に
いるのは魔物の
ガキだからな」

「以前こいつに逃げられた
スポンサー様が
大変お怒りでなあ」

「流れたガキの恨みに
研究中の魔物の種を
魔法で着床させたのよ」

「魔物の胎児は母体
の魔力を吸収して
育つらしいんだが」

「どうやら精液に
含まれる魔力も
吸収するんだとよ」

「魔物のガキか
なら遠慮はいらねえな!」

「そういうことだ」

「おい、もう一周
輪姦すぞ!!」

「マシコぶっ壊れる
くらいザーメン
喰わせてやれ」

そこで私の
何かがキレた

自身の体の
異常すら忘れ…

怒りのまま
抜刀し…

飛び掛かった…



はずだった…のに…

「さすがドララ
すげえ締め付けだ」

「もう出ちまい
そうだぜ!!」

「いやッ!
出さないでえッ!」

「うるせえ!!
子袋にたつぷり
出してやる!!」

「いや、それだはッ!!」

「ださないでえッ」

私は男たちに
犯されていた…

どうしてこんなことに
なってしまったのか…

答えは簡単だった…



「オラオラどうした!? ドラフの姉ちゃん!!」

「このままじゃまた 出されちゃうぞり」

「あっああっ!! このっ くっ...卑怯...者おおっ...っ!!」

「クッ...クッ...」

「あほか!! 尻にかかると方が 悪いんだよ この雌ドラフが!!」

「必ず...っ...お前たちをつ たおして...っ ああああっ!!」

「下の回はもうでもねえみた...たぞ!!」

「俺のチンポを 涎出しながら 銜えてるじゃねえか!!」

「俺のザーメンが そんなに欲しいのか?」

「違...っこれ...っはっ... ああっ!!」



「たっぷり受け取れや!」

灼熱のマグマの ように熱い子種が 私の無防備な 子宮内を焼いてくる...

どこの誰ともわからない 男の子種で孕まされる...

「いやー出さないでっ!!」

「これ以上出されたら 赤ちゃんがっ!!」

その恐怖に雌の悲鳴を あげるしかなかった